プラン・ニュース［2018 Spring］NO.107

PLAN NEWS



キーパーソンに聞く

佐々木則夫さん サッカー日本女子代表前監督

「成功の反対は失敗ではなく、チャレンジしないこと」
～国際女性デー2018によせて～

Because I am a Girl

「女の子の未来に、投資を。」

春からの新たなキャンペーンと支援方法一部変更のお知らせ

プランのコミュニティ開発

大地震から3年目を迎えたネパールの「今」を職員がリポート

発行：公益財団法人プラン・インターナショナル・ジャパン

キーパーソンに聞く

佐々木則夫さん

●十文字学園女子大学副学長、サッカー日本女子代表前監督

成功の反対は失敗ではなく、チャレンジしないこと

日本サッカー協会 なでしこジャパン（日本女子代表）をワールドカップ初優勝まで導き注目された、前監督の佐々木則夫さん。女性の力を伸ばす秘訣から男性リーダーの役割まで、女性の可能性を広げるためにできることを語ってくださいました。

※聞き手はプラン・インターナショナルの理事、大崎麻子です。

大崎麻子（以下略） プランでは、女の子支援のひとつとして、「サッカープロジェクト」を行っています。※参加した女の子たちは練習や試合を通じて仲間との連携の大切さを学び、リーダーシップを養うことができました。また、サッカーを通じて自分に自信をつけることができました。

佐々木則夫さん（以下敬称略） サッカーを含めたスポーツをすることで、純粋に「体を動かす楽しさ」が女の子にも体験できる。加えて、パスをしてゴールに結びつけるという「関わる楽しさ」「成長した楽しさ」というものがあって、それがリーダーシップに結びつくのだと思います。

――アフガニスタンの女性サッカーチームのリーダーシップトレーニングで印象に残ったことがあります。女の子に将来のロールモデルを尋ねると、「私たちがなります！」と答えたんです。女の子だってこれだけスポーツができるということを、次の世代に伝えたいと。

佐々木 なでしこジャパンの選手たちも同じようなことを言っていました。「自分たちが世界大会で活躍して、後輩に私たちを目指してほしい。女の子がサッカーをする誇らしさを訴えたい」と。

――佐々木監督は、選手たちをナンバーワンの地位まで押し上げたわけですが、どのようなことを心がけましたか？

佐々木 選手一人ひとりが「もっと上手くなりたい」「世界で活躍したい」という思いをもつのが大切であり、それには自信をつけることが欠かせないと考えました。

――女性は自己肯定感が低いとよく言われますが、どのように選手たちの自信を育んだのですか？

佐々木 とにかくポジティブなコーチングを心がけました。2008年の北京オリンピックの前の記者会見で私が「目標のベスト4の可能性が70％ぐらいに高まっている」と言ったところ、選手たちに「そんなに甘いものじゃないから」と言われました。彼女たちは決勝トーナメントにいったことがないから、どこか自信のなさがあったのでしょう。そんななかで、私はひたすら選手たちの技術が進歩した映像を見せていました。選手たちも「できる」という心になって、結果、ベスト4になることにつながったのかもしれません。

――スポーツというと怖い指導者とそれに必死についていく選手という、スポ根的なイメージをもってしまう面がありました。佐々木監督のような褒める指導は主流になってきているのでしょうか？

佐々木 今は指導者の意識が変わり、褒めることを含めて、選手にどのように伝えるのかを慎重に考えるようになっていると思います。僕はつくづく、コーチというのは「馬車（コーチ）に選手を乗せてクライアントとして目的地まで運ぶ」ものだと思っています。そのためには選手の質を見て激励して伸ばすことが大切。なでしこの選手には少し人に委ねるところがあって、徹底的に自分で判断することも指導しました。また、選手が緊張していたらリラックスさせる。2011年にワールドカップ決勝戦でアメリカと戦ったときも、「アメリカにおいついてすごい！」「PKを楽しんでこい」って言ってたんです。結果、見事に勝ちましたね。

――女性の力を伸ばすにはきめ細かい指導が大切だと思いました。なぜ女性の管理職は増えないのかという理由によくあげられるのが無意識の偏見です。無意識のうちに、性別を含む相手の属性によって態度を変えることを指します。たとえば、管理職の男性は無意識のうちに男性の部下にはきめ細かく指導するのに対し、女性の部下には曖昧なフィードバックしかしないというのです。

佐々木 なるほど。とくに日本の女性は気配りのよさという素晴らしい資質をもっているので、男性も今以上に意識して、細かい指導ができるといいですね。

――女性が活躍し続けるために、男性リーダーが果たしうる役割とは何だとお考えですか？

佐々木 たとえば男性に比べてとくに女性のマイナーなスポーツは、財政面で厳しい面があります。それをカバーできる状況を作ること。もうひとつは、成長期の女性アスリートをケアをする体制を整えること。月経や体格の変化による怪我などに苦しむアスリートたちを、サポートするのが必要なのです。女性たちが活躍しやすい環境整備を、男性リーダーにはぜひしていただきたいですね。

――これからの時代を生きる若い女性や女の子たち、そして男性リーダーや娘をお持ちのお父様がたへのメッセージをお願いします。

佐々木 男性には、いい背中を見せてくださいと言いたいです。柔らかい背中を見せると女性は安心するので、会話が弾みやすいんです。相手が緊張しているなと思ったら僕のようにダジャレでも言って場を和ませる（笑）。女性には、日本中がその力に期待しているから自分を信じて頑張ってほしい。「成功の反対は失敗ではなく、チャレンジしないこと」です。



Profile

ささき・のりお　十文字学園女子大学副学長、サッカー日本女子代表前監督。
2007年日本サッカー協会 なでしこジャパン（日本女子代表）監督に就任。北京オリンピックでベスト4、FIFA女子ワールドカップ ドイツ2011では、日本サッカー初の世界一へと導く。翌2012年ロンドンオリンピックでは、サッカー史上初となるメダル（銀）を獲得。2011年国民栄誉賞（サッカー日本女子代表）、紫綬褒章、2012年FIFAバロンドール女子最優秀監督賞（2011年年間表彰）などを受賞。



Profile

おおさき・あさこ　プラン・インターナショナル理事、関西学院大学客員教授
国連開発計画(UNDP)で災害・紛争復興などの数多くの事業を手掛けるとともに、ジェンダー主流化に従事。現在はフリーの国際協力・ジェンダー専門家としてメディアでのコメンテーターとしても幅広く活動。東日本大震災では復興支援事業ジェンダーアドバイザーとして、被災地の女性支援に従事した。近著『エンパワーメント 働くミレニアル女子が身につけたい力』（経済界）。

国際女性デーにトークイベントを開催！

3月8日に東京・オープンコラボレーションスペース「LODGE」で、プラン・インターナショナル国際女性デー2018イベント、サッカー日本女子代表前監督 佐々木則夫氏と語る～「今、男性ができること。女性の可能性は無限大」～を開催。女性をとりまく環境に変化を起こすために人々が変えていくべき意識、行動などを語りました。「女性部下と上手くコミュニケーションを取る秘訣が知りたい」との会場からの質問に、「目が合ったときにとにかく一言声をかける。そうするとお互い構えなくなるので、仕事の真面目な話もしやすくなります。ダジャレも大切です」と佐々木さんが答える場面も。和やかな雰囲気のなか、女性活躍のためのヒントを探る時間となりました。



※人気の高いサッカーを通じて、地域の人々を巻き込みながら女の子のエンパワーメントを目指す取り組み

撮影：金井塚太郎／プラン・インターナショナル

持続可能な開発目標（SDGs）の達成にむけて

女の子への応援は、よりよい未来への投資

誰も置き去りにしない世界を実現するために、より積極的に女の子たちを支援することが求められています。
女の子への支援は、よりよい未来をつくるために不可欠な、いわば「投資」だと言えるのです。
プラン・インターナショナルはこの春、「女の子の未来に、投資を。」というメッセージを通じて
支援の輪を広げるキャンペーンを始めました。



「女の子への投資は正しいことです。そして賢いことなのです」

ンゴジ・オコンジョ・イウェアラ（ナイジェリア人女性／世界銀行元副総裁）

2015年に国連サミットで採択された「持続可能な開発目標」（Sustainable Development Goals 以下SDGs）は、地球の持続可能性を強く考慮し、国連加盟193カ国が2016年から2030年までに達成する目標を掲げたものです。

格差のない「誰も置き去りにしない」世界を目指し、17ある目標のうちの5番目に「ジェンダーの平等」をあげています。人道的に見逃せないのに加え、すべての人が幸福な社会の実現にはジェンダーの平等は不可欠であることが、さまざまなデータで裏付けされているからです。たとえば、「女の子が一年間長く初等教育を受けると、その子が将来得る収入が約11%増加する」（※1）、「すべての女性が中等教育を修了すれば、5歳未満児の死亡率は49%減り、1年で300万人の命を救える」（※2）などのデータが明らかになっています。女の子支援は、よりよい未来をつくるための、いわば「投資」だと言えるのです。この「投資」には金銭的なメリットはありませんが、社会がよくなるというリターンを受け取ることができます。

しかし、支援はいまだに十分だとは言えません。世界で読み書きができない人口の3分の2を女性が占め（※3）、15歳から19歳で約4分の1の女の子がなんらかの身体的暴力を受けたことがあります（※4）。

SDGsが掲げる「誰も置き去りにしない」世界を実現するためには、女の子の明るい未来を阻む暴力や差別を一刻も早くなくすこと。そして、私たち一人ひとりが行動を起こすことが大切です。

Sponsor's Voice



治部れんげさん（経済ジャーナリスト）

2000年頃、取材で上海へ行く機会がありました。経済成長を体感できる街では見るものも聞くものも、大きな刺激になりました。一方で、当時、私がスポンサーだった「チャイルド」は中国の山奥に住む女の子。母親は私と同い年で竪穴式住居に住んでいて、手元の地図帳を何度見ても、彼女の住む村を見つけることはできませんでした。このような経済格差の解消は、本来なら政府の役割です。でも多くの開発途上国では、政府はその役割を果たすことができていません。政府が果たしきれない役割を、個人の行動で担っていくこともできると思います。その際、「投資をする」という意識で臨むのもひとつの形だと思います。急成長する中国企業の株を買うのが「投資」なら、地図にない村を支援し女の子に通学の機会を提供することもまた「投資」と言えます。そして、プランのスポンサーの「投資」は「誰も置き去りにしないため」のものです。



国連サミットで採択されたSDGsでは、よりよい世界を実現するための17の目標を定めています。

※1 出典：Comparable Estimates of Returns to Schooling Around the World, (World Bank Group,2014)
※2 出典：Education transforms lives (UNESCO,2013)
※3 出典：The World Women 2015 Trends and Statistics (United Nations 2015,xi)
※4出典：A Statistical Snapshot of Violence Against Adolescent Girls (2014,UNICEF)

“誰も置き去りにしない”ための支援を拡大

支援方法の名称が一部変更になりました

過去数十年の国際社会の取り組みや皆さまのご支援により、貧困から脱却する人々が増える一方で、声をあげる手段も情報ももたない人々がチャンスや支援を得ることができずに、以前にも増して「見落とされ、取り残される存在」へ追いやられています。紛争や気候変動による自然災害の頻発と大規模化などが、格差の拡大に追い討ちをかけています。プラン・インターナショナルは、世界情勢の変化と持続可能な開発目標（SDGs）が掲げた「誰一人置き去りにしない」という理念に基づき、活動を広げてまいります。これを受けて、いくつかの支援方法の名称を変更しました。以下にあらためてご紹介します。







支援方法一覧

プラン・スポンサーシップ	子どもたち、とりわけ女の子たちの可能性を応援することで、地域全体を豊かに発展させていく活動です。その成果は次世代にまで波及する、持続的な支援です。交流を通じて、チャイルドの人生にエールを送ることができます。
ガールズ・プロジェクト （旧：Girl's Project継続支援）	女の子が直面する問題に焦点を当てて解決を目指します。女の子たちをリスクから守ると同時に、自立していくためのプロジェクトを実施します。
グローバル・プロジェクト （旧：プラン・マンスリー・サポーター）	「紛争と難民」「気候変動と災害」「少数民族」「障がい」「弱い立場におかれた子どもの保護」などの今日的な課題解決に必要なプロジェクトを実施します。
オーダーメイド・プロジェクト （旧：特別プロジェクト）	一個人または一法人でご支援いただく方法です。活動地域を訪問して落成式などの記念イベントに参加したり、成果物となる施設に記念プレートを設置することなどが可能です。
一口100万プロジェクト （旧：一口100万円で参加！プラン特別プロジェクト）	個人やグループ、企業などが共同でひとつのプロジェクトをご支援いただく方法です。

名称変更に関するQ&A

Q 名称が変更することで、必要な手続きはありますか？

A ご支援者の皆さまには、お手続きは一切必要ございません。

Q プラン・マンスリー・サポーターからグローバル・プロジェクトに名称が変更すると、これまでの寄付の使われ方が変わるのですか？

A これまでと同様に、困難な状況下にある子どもや人々の支援のために使わせていただきます。とくに現地の支援ニーズが高まっている紛争の影響下にある人々など、そのときの「地球課題」に合わせてプロジェクトを実施します。このため、実施内容は随時変わっていきます。実施状況はウェブサイトや報告書でご確認いただけます。

Q これまでは、金額も回数も自由に選べ、プロジェクトが指定できる「プラン一般プロジェクト」に寄付をしていました。4月からの支援方法には「プラン一般プロジェクト」は含まれていませんが、今後はどうすればいいでしょうか？

A 「グローバル・プロジェクト」と「ガールズ・プロジェクト」で実施中のものからとくに関心のあるプロジェクトを選んで、金額も回数も自由にご寄付いただけます。プロジェクトは選ばずに、事務局にお任せいただくことも可能です。皆さまの温かいご理解をよろしくお願い申し上げます。

●お問い合わせ先：広報担当TEL：03-5481-0030／Mail：hello@plan-international.jp

～ネパール 大地震から3年目を迎えて～

災害を乗り越える原動力に！プラン・スポンサーシップが築いた活動地域とプランの絆



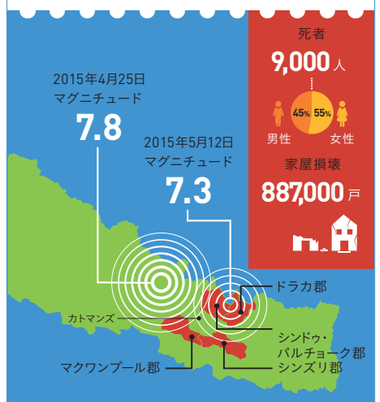
ネパール東部に位置し、山合いに村が点在するシンズリ郡。美しい風景が広がりますが、震災で深刻な打撃を受けました

皆さまのご支援のもと、プラン・スポンサーシップの活動が地域にどのような効果をもたらしているのかをリポート。第6回は、未曾有の大地震から丸2年が経過し3年目を迎えたネパールの被災地の様子を、プラン職員の現地報告とともにお届けします。



教育関係者から課題を聞く海藤職員

数字で見るネパール大地震



緊急・復興支援活動を実施した地域
マクワンプール郡、シンズリ郡、ドラカ郡、シンドゥ・パルチョーク郡

数字で見る主な活動成果

子どもの教育
3万5,000人以上

保健へのアクセス
20万人以上

安全な水と衛生
10万5,000人以上

シェルター／仮設住宅
19万人以上

生計向上
5万3,000人以上

緊急・復興支援の土台は信頼関係

Project.1
巡回チームを結成し聞き取り調査を実施

地域の人々や行政官、関係機関との長い時間をかけて築いた信頼関係があるからこそ、緊急・復興支援を行えます。プランはスポンサーシップを通じて信頼関係を構築し、必要とされる支援を素早く届けることができました。

たとえば、コミュニティ・ボランティアとして人材育成を行っていた若者たちを新たにトレーニングし、4人一組の「巡回チーム」を59チーム結成。震災後の地すべりで道路が寸断され支援が行き届かない山間部のコミュニティに、聞き取り調査を行うことができました。また、シンズリ郡は多くの少数民族が暮らし識字率が低いため、どこでどのような支援が受けられるのか、人々に情報が行きわたっていない面がありました。そんななか、プランは被災状況や被災者の把握などの情報提供を積極的に行いました。結果、保護者がいなくなった子どもたちが人身取引や児童労働の被害にあうことを防止することもできました。



被災した子どもと家族から話を聞く竹崎職員

地域開発は災害への備え

Project.2
防災教育とセットで新校舎建設をサポート

緊急支援は一時的なものであり、短期間で終了します。対して、スポンサーシップはその先の長期にわたる地域開発を見据えて活動するものです。そのため、防災教育や備蓄など、次の災害への備えも行うことができます。

シンズリ郡では、382人が通う学校の校舎が地震で損壊。住民が協力して竹やシートで仮設校舎を建設し、子どもたちの勉強が途切れないよう学校を運営しました。2017年7月に完成した新校舎を建てる際には、耐震基準に沿うように、プランが技術支援を実施。給水設備や手洗い場、男女別トイレを整備し、計画段階から学校運営委員会の女性メンバーの意見を取り入れて生理用品の処理場所を設置するなど、女の子や女性に配慮する学校作りを心がけました。また、スロープや点字ブロックを設置し、障がいのある子どもたちにもやさしい学校となりました。防災教育ではまず先生がトレーニングを受け、それを生徒などに指導します。校長先生が、退職後もソーシャルワーカーとして地域と学校を支えている例もあります。

＊この調査は外務省の国際開発協力関係民間公益団体補助金を一部受けて実施しました。



被災地を調査した海藤職員（前列左端）と竹崎職員（前列左から2番目）。マクワンプール郡の水管理委員会のメンバーと

プラン職員が見たネパール復興への道のり

復興を支える若者や妊産婦たちの生の声を、現地調査に向かったプラン職員がレポートします。

復興を支える若者たちは、元チャイルド

竹崎 恵 職員 プログラム部

調査では被災地域で活動する若者に大勢会い、話を聞きました。彼らの多くは、小さいときには「子どもクラブ」、10代後半になると「ユースクラブ」のメンバーになります。そして、「子どもクラブ」のときに得た知識を生かし、年長になると同世代の仲間、さらには村の中心的なリーダーになっていることもありました。話をする若者は熱意にあふれ、「自分のコミュニティのために何かやらなくては」、というある種の使命感まで感じられました。彼らは、10年から20年をかけて地域開発を行うプランの活動が生み出した貴重な財産です。頼もしい女の子と男の子に出会い、復興途上ではありますが、決して未来は暗くないと思いました。彼らへの応援を続けたいです。



助産所で出産した母親たちに聞き取りをする海藤職員



ユースクラブのメンバーと話し合う竹崎職員（写真奥2人目）

安心して出産できる環境作りが大切だと実感

海藤純子 職員 プログラム部

地震のショックは、妊娠中や産後の女性たちの体にも影響を与えました。ただでさえ十分な産前産後ケアがない地域では、彼女たちの状況は悪化したのです。たとえば、トラウマやストレス、食料が不足したことで母乳が出なくなるケースも見られました。こうした状況を受け、プランは被災地で女性への栄養補助剤の支給を行ったりしました。また、コミュニティ保健ボランティアたちのトレーニングを積極的に実施。妊娠中の女性たちのグループ作りも支援し、産前産後、そして新生児のケアについて、母親たちがお互いの経験や知識の情報交換をできる体制を作りました。「初めての出産が心配でしたが、周囲の母親たちが助産所で安心して出産できるから大丈夫と言ってくれました。今は、助産所で出産してよかったと思っています」という言葉が印象に残りました。

日本からの応援、引き続きお願いいたします！

3年間の緊急・復興支援は2018年4月に終了する予定ですが、多くの課題が残っています。震災後2年を経ても仮設教室で授業を受けている子どもたちがいます。危険だと認識しつつも被災した教室で学期末試験をせざるを得ないことで、苦悩している教師たちにも出会いました。校舎倒壊の被害を受けた学校があまりに多く、政府による新校舎建設や修繕が間に合いません。また、屋外での排泄をなくすために苦労して住民たちが建設したトイレが、一瞬にして倒壊したコミュニティもあります。

子どもたちが健やかに安心して暮らせるよう、今後も続く地震や洪水の危険に備える必要があります。プラン・スポンサーシップを通じて、災害に強い地域づくりと長い目でみた地域の復興を、同じ地震による被災の痛みを知っている日本からぜひ支え、応援してください。



たくさんの子どもたちが職員を出迎えてくれました！

●ウェブサイトからのプラン・スポンサーシップのお申込みはこちらまで。同封のご案内チラシもご覧ください　https://www.plan-international.jp/join/sponsor/

Because I am a Girl（BIAAG）キャンペーンで実施されるプロジェクトの報告です

エチオピアとバングラデシュのプロジェクトの進捗と参加者の声をお届けします

昨年7月から新たに始まったふたつのプロジェクトの進捗をお伝えします。エチオピアでは2月6日の「国際女性性器切除（FGM/C）根絶の日」を記念し、関係者の集会を開催しました。
また、バングラデシュでもプロジェクトへの参加が決まった女性たちからの声が届きました。

From

エチオピア

死に至ることもある慣習「女性性器切除から女の子を守る」プロジェクト

リポーター / 楠 祐子職員（プログラム部）

施術を受けていなくても、堂々と村を歩きたい

2月15日に、「国際女性性器切除（FGM/C）根絶の日」（2月6日）を記念して、「女性性器切除」（Female genital mutilation/cutting、以下FGM/C）の弊害とプロジェクトの意義を確認するための集会を開きました。子ども委員会のメンバーをはじめ、行政官、警察、宗教リーダー、裁判所やコミュニティリーダーなどのプロジェクト関係者300人以上が参加し、自分たちの考えを発表しました。参加した女の子たちは、「FGM/Cに反対する活動をしていると、いじめられたり、からかわれることもあります。みんなの考えが変わって、私たちが堂々と歩ける村になってほしい」と成果に期待を寄せました。



（写真左から）子ども代表として参加したメブラットさん、キディストさん、イェヌさん



集会の最初にスピーチをする女性と子どもの福祉担当局長のマーサさん（写真中央）

「国際女性性器切除（FGM/C）根絶の日」（2月6日）を記念した集会の参加者の発言

アベラシュさん（6人の子どもの母親）
「自分の娘には受けさせたくない。娘は私が学び伝えたことを友だちに伝えています」

フセインさん（宗教リーダー）
「すでにみんなの意識が少しずつ変わってきたと思います。妻は、もし私が娘の施術を命令したら、警察に通報すると言っています」

マーサさん（女性と子どもの福祉担当局長）
「プロジェクトでは、プランや関係者との連携を強化すること注力します。お互いが協力しあえば、きっとうまくいくと思います」

ゲツさん（郡教育局長）
「警察や裁判所も含めた関係者の協力体制は大切です。人々の意識や行動が必ず変わると思います」

CASE STORY

参加者の**サレームさん（仮名・12歳）**

友だちが「施術を受けないと、集中力を失い、礼儀作法も身につかず、結婚相手が見つからない」と言うので、施術を受けました。でも出血がひどく、とても痛かったので後悔しています。友だち同士のつながりや周囲のプレッシャーはとても強いので、自分から進んで施術を受ける女の子も多いのです。FGM/Cの怖さをもっと伝え、人々が考え方を変えるためには長い時間が必要だと思います。

From

バングラデシュ

災害多発地域に暮らす「少数民族の女性たちの収入アップ」プロジェクト

リポーター / 澤柳孝浩職員（プログラム部）

地域の人々が選んだ参加者

コミュニティリーダーをはじめとする地域の人々が、参加する女性たちの候補者リストを自分たちで作成しました。公正なプロセスにするために、大人だけではなく、地域の事情に精通した若者グループも選考に参加しました。経済的な困窮度、少数民族、カースト、女性世帯主や病気や障がいの有無などを考慮しました。現在までに、対象村で合計60回の住民集会と候補者の戸別訪問を経て、約1,500人の女性が参加者として決まりました。今後はさらに候補者の戸別訪問と詳しい聞き取り調査を継続し、最終的に2,000人の参加者を決める予定です。



推薦された女性たちから直接話を聞くために戸別訪問するプランのプロジェクト担当者



ニーズの高い女性が住む場所の地図を作る住民たち



CASE STORY

参加者の**シプラさん（25歳）**

2007年にサイクロン・シドルが襲ったときに、家が壊れてしまい、新しく家を建てました。その家も雨季には高潮の被害を受けます。家が水浸しになっても、水が引くのを待つだけです。このプロジェクトについて知ったとき、本当に嬉しかったです。私は、以前、縫製で生計を助けていました。でも夫が怪我をしたときに治療費のため、ミシン台を売りました。夫の収入は限られているので、生活は厳しいままです。このプロジェクトに参加して、私が養鶏や菜園、道沿いの紅茶売りや縫製などで収入を得て、家族を支えることが私の夢になりました。



CASE STORY

参加者の**スイーノさん（25歳）**

幼いころ父親がいなくなり、母親が家事使用人をしながら私たちを育てました。経済的事情で私も小学校5年生で学校を辞めて、家事使用人として働き始めました。17歳で結婚し、今では4歳と2カ月になる2人の子どもがいます。夫が漁師をして家計を支えていますが、雨季になると海が荒れて、漁ができません。このプロジェクトに参加して、養鶏や家畜の飼育などで、私が家計を助けたいです。

ご支援をお待ちしております！

ガールズ・プロジェクトのご支援は、継続／都度のどちらでもお申し込みいただけます。ご支援の詳細については、こちらをご覧ください。
https://www.plan-international.jp/join/girls/

グローバル・プロジェクト（→P5）と緊急支援などの取り組み

多様化する難民問題により一層の支援を展開

2017年度、活動国51カ国のうち、アフリカだけでも10カ国が難民の受け入れ先になりました。ますますニーズが高まる難民支援への直近の取り組みをお伝えします。



難民居住区の子どもひろばで、本を読んだり友人とのおしゃべりに興じる子どもたち

ウガンダ

紛争から逃れて、安心できる環境を「南スーダン難民の子ども保護」プロジェクト

先が見えない南スーダン難民危機

南スーダンでは、2013年の大規模な武力衝突により多くの人々が家を離れて避難生活を余儀なくされました。2016年7月にはさらに状況が悪化し、2017年12月に政府と反政府勢力との間に停戦合意が結ばれましたが、先行きは不透明なままです。2017年12月現在で約243万人（※1）が近隣国に逃れ、このうち約104万人がウガンダに集中しています。

男性の多くは戦闘員になったり家や畑を守るために母国に残るので、南スーダンからウガンダに逃れた難民のうち、子どもと女性の割合は80%以上を占めます。なかには幼い子どもを抱えた女性や、保護者を失った子どもたちもいます。さらに、身体的または性暴力や、強奪の現場を目撃してしまった子どもも少なくありません。プランは、アルア県及びアジュマニ県の難民居住区と周辺のホストコミュニティを対象に、支援活動を実施。子どもがストレスから解放されて安心して遊んだり学んだりできる環境づくりのほか、女性を対象とした衛生改善などを行っています。



生理用品キットを受け取り喜ぶ女性

●主な活動内容

難民と地域住民1万6,400人（うち子ども1万2,700人）を対象に

- ケースワーカーによる子どもたちへの個別支援
- 子どもひろば※2の運営
- 子どもの保護に関するトレーニング
- 生理用品の配布など、月経時の衛生を改善する活動

※このプロジェクトは、「グローバル・プロジェクト」と特定非営利活動法人（認定NPO法人）ジャパン・プラットフォームの助成金で実施しています。

現地駐在員からのメッセージ

西田 亜理沙 職員（プログラム部）

2018年1月にプラン・インターナショナルに入局し、約1年の予定でウガンダに駐在しています。ヨルダンのシリア難民キャンプやスリランカのタミル帰還民の支援に関わった経験を、プランでも生かしたいと思います。これまでの難民支援で確信したことは、子どもが希望の光であり、子どもの笑顔が疲弊したコミュニティを元気にする、ということです。それはウガンダでも、同じです。これから試行錯誤が続きますが、みんなで力を合わせて、ひとりでも多くの子どもの笑顔を守りたいです。



ウガンダの南スーダン難民居住区の子どもたちに囲まれる西田職員

ご支援をお待ちしております

https://www.plan-international.jp/join/global/

実施中のプロジェクトの詳細・支援方法についてはこちらでご覧いただけます。同封チラシもあわせてご覧ください。

※1 出典：UNHCR Regional Update, South Sudan Situation, 1 – 31 December 2017

バングラデシュ

約6万人のロヒンギャ難民に緊急支援を実施しました



女の子から生理に関するニーズを聞くプラン職員

●主な活動内容と成果

- 公共トイレの設置（700基）
- プライバシーに配慮した、女性のための水浴び場の設置（200基）
- 石鹸や歯ブラシなどの衛生用品キットの支給（1万世帯）
- 生理用品キットの支給（1万人）
- 衛生に関する意識啓発セッションの実施（686回、2万9,771人が参加）

参加者の声

ロヒンギャ族の女の子

最初に避難所に到着したとき、何も持っていませんでした。トイレに行くときは、誰もいない早朝に母親に付き添ってもらいました。私たちの慣習では娘の使用済みナプキンを、母親や年長の女性がひそかに離れた場所に埋めます。でも、避難所に埋める場所はあまりありません。布ナプキンをもらったおかげで洗って繰り返し使えるようになり、捨てる場所を探す必要がなくなりました。

難民キャンプの劣悪な衛生環境を改善

2017年8月末からミャンマーのラカイン州で発生した暴動とその混乱が原因で、68万人を超えるロヒンギャ族の人々が隣国（※3）バングラデシュ、コックスバザール県に逃れました。難民キャンプでは衛生状況が悪化し、ジフテリアなどの感染症が蔓延。そのため、プランは衛生環境の整備を最優先しました。さらに、女性のプライバシーに配慮した水浴び場を設置することで、混乱のなかで高まる性暴力のリスクに対応しました。コックスバザール県の4つの難民キャンプで活動し、支援者の皆さまのご協力を得て、2017年9月から2018年1月までの間に6万人に支援を届けることができました。

プランが設置した公共トイレは3万人以上、女性のための水浴び場は約2万人に使用されています。現在は、これらの設備を適切に維持管理するための支援を展開しています。また、衛生用品キットと生理用品キットも、それぞれを1万人を対象に配布しました。

ミャンマー

暴動発生後に中断していた「ロヒンギャ族の子どもの虐待防止」プロジェクトを再開

今年から再び活動

2012年の暴動の影響で、ロヒンギャ族やその周辺に暮らす人々は不安定な暮らしを強いられていました。プランは、民族間の垣根を低くし、子どもたちが暴力の影響を受けることなく安心して暮らせる地域の実現にむけた取り組みをスタート。しかし、直後にラカイン州における暴動発生とそれに伴った難民が発生し、活動の一時中断を余儀なくされました。

そして、2018年1月から活動を再開。村の代表者たちと「子どもひろば」（※2）の設置場所などの話し合いを始めるなど、順調に活動が進捗しています。



将来の理想の村の姿についてインタビューに答えるロヒンギャ族の男の子

現地の子どもの声

ミャンさん（仮名、14歳）

自分の村が子どもにとって暮らしやすい村になって欲しい。大人と一緒に子どもの安全について考えたいと思います

※2災害・緊急時に、子どもの保護と心のケアのために設置・運営されます。被災地（または現地）では、混乱のなか、子ども、とりわけ女の子は虐待や搾取の対象となる危険性が高まります。子どもたちが一日もはやく日常を取り戻せるよう、遊びや学習を取り入れることで、子どもたちが抱えるストレスを軽減させ、自尊心を育み、自分を守れるようになることも視野に入れて活動します。また、保護者も含めた子どもの保護への理解を深める場としても重要です。

※3 出典：INTER SECTOR COORDINATION GROUPS Situation Report : Rohingya Refugee Crisis 27 January 2018

現地報告 **グアテマラ** 「ジェンダー平等促進」プロジェクト

性別に関係なく すべての子どもたちが 学校に通える日を目指して

From Guatemala

皆木昭宏職員（現地プロジェクトマネジャー）



地域の子どもたちと皆木職員（写真中央）

2017年12月から、グアテマラで実施している「ジェンダー平等促進」プロジェクトの現地責任者として赴任しました。実施地域のアルタ・ベラパス県のコミュニティは、世界遺産のティカル遺跡と、首都グアテマラシティとの間に位置します。住民の多くは民族衣装を着た先住民で、標高が高い地域は、「カルダモン」と言われる独特の香りをもつ香辛料の産地です。また20年ほど前まで続いた内戦で、特に被害を受けた地域のひとつでもあります。プランはこの地域で10年以上活動しており、私が担当する地域だけでも、日本のスポンサーと交流するチャイルドが約130人います。地球のほぼ裏側にあたる日本から、こんなにもたくさんの温かい支援が届いているのを知り、驚きました。



コミュニティの住民組織メンバーとの話し合い

小学校には無償で通えますが、多くの女の子たちは高学年になると、家の手伝いなどのために学校に行く機会が制限されてしまいます。このプロジェクトでは、子どもたちや小学校の先生たちに向けてジェンダー平等について研修を行う一方、行政や地域の人々を対象に、性別が理由で教育の機会を奪われることがないように、働きかけをしていきます。いつの日か、男女の隔てなく、子どもたちみんなが学校で学べるように、少しでも何かできたらと思っています。

現地報告 **インド** 「環境教育」プロジェクト

プロジェクト終了後も 現地の人たちがしっかり 活動を続けていました



「子どもエコ・クラブ」の女の子たちと鵜飼職員（中央）

From India

鵜飼香織職員（企画管理部）

2017年11月、活動国視察でインドを訪問し、1年前に終了したプロジェクトを視察しました。環境破壊や気候変動による災害で、大きな影響を受けているインド。このプロジェクトでは、4年間で地域の人々が環境問題について学び、自分たちの村の衛生環境を向上させ、家庭菜園や植林など地域の緑化をすすめました。

今回訪れた村は、質素ながらも清潔に保たれ、作物が豊かに実っていました。当時、活動の主役だった「子どもエコ・クラブ」のメンバーは、今も自分たちの村でゴミの分別やトイレの使い方など、学んだ知識の普及を続けています。大人たちも課題解決に向けて努力を続けています。きれいな自分の村が誇らしく、大好きと言う子どもたちに胸が熱くなりました。プロジェクトが終了しても、住民自身が自分で活動を続けていくことが、プランの目標であることを改めて実感しました。



佐々木千春さん

ユース活動報告

この春、 充実した活動を終えて メンバーを卒業

私は8カ月間、G-SChoolメンバーとして活動しました。この間、途上国だけでなく、日本のジェンダーや多様性の問題など幅広く考えることができました。一番印象に残った活動は、中学生・高校生と一緒に、男女差別をなくすために、東京都に対する政策提言書を作成したこと。新しい東京都の方針をみんなで読み込み、とくに注力してほしいポイントをまとめ、2017年10月の「国際ガールズ・デー」に、東京都知事と東京都議会の議長と副議長に直接手渡しました。大学卒業後は、国連機関などで女性や開発の問題に関わっていきたいです。

イベントを楽しみながら 大勢の力で途上国の教育支援

ジョー・ポーノビンさん

東京ヤマソンとは3人または4人一組のチームで、JR山手線の一周29駅を、12時間以内に歩いて回るというファンドレイジングイベント。参加費等の収益はすべてプラン・インターナショナルに寄付され、オーダーメイド・プロジェクトに活用されます。イベントの創設者・CEOであるジョー・ポーノビンさんに、お話をうかがいました。



2017年の参加者のみなさん



東京ヤマソン実行委員会のCEOを務めるジョーさん

楽しく冒険しながら途上国を支援できるんです

私は日本政府が招へいするJETプログラムの英語教師として日本に来たのですが、ここで暮らすうちに、ボランティア活動のすばらしさに気づきました。同じ思いをもつ仲間たちと一緒に立ち上げたのが、東京ヤマソンというイベントです。

今回で10回目を迎える東京ヤマソンは、過去9回で2600万円を超える寄付を行ってきました。参加者数も第一回の110人から、現在では1000人を超える規模に拡大しています。プラン・インターナショナルとの連携は2016年から。私たちはプランのビジョンと熱意にいつも感銘を受けています。昨年の東京ヤマソンで集まった寄付金は、スリランカにおけるコンピュータ教室建設プロジェクトに活用され、現在、順調に建設がすすんでいるとの報告をいただいています。一方、今回のヤマソンで集められる寄付金は、オーダーメイド・プロジェクトを通じて、ベトナムの学校建設プロジェクトに使われます。ベトナムという、日本からそう遠くない国の人々を支援できるのが楽しみです。

参加者のみなさんは、自分たちのペースで好きなルートを選び、自由に歩ける点が気に入っているようです。その間に東京というすばらしい街でさまざまな発見をし、自分たちの限界に挑戦しながら冒険を楽しんでいます。そして同時に、世界で助けを必要としている人々に、寄付という形で手を差し伸べることもできるのです。みなさんも私たちと一緒に、意義ある冒険の旅に出てみませんか？

第10回 東京ヤマソン

- 開催日：5月12日（土）
- スタート・ゴール地点：TOKIAビル（JR東京駅・丸の内南口出口から徒歩3分）
- 参加費：1チームにつき1万2,000円（全額オーダーメイド・プロジェクトに寄付されます）

※詳細は以下のウェブサイトをご覧ください
http://tokyo-yamathon.com/ja/

オーダーメイド・プロジェクトQ&A

オーダーメイド・プロジェクトとは？
A：プロジェクトを一個人もしくは一法人にご支援いただくもので、活動国や分野など、支援者のご意向と現地ニーズをすり合わせてご提案します。今回ご紹介した「東京ヤマソン」のように、国内のチャリティイベントで寄付を集めてご支援いただくこともできます。個別の提案書・報告書の作成、記念プレートの設置のほか、現地訪問も可能です（訪問にかかる実費は支援者のご負担となります）。

支援者はどのようなきっかけで支援を決めるのでしょう？
A：個人の方の場合には結婚、定年退職といった人生の節目に、また法人の場合は「CSR（企業の社会的責任を示す活動）のひとつとして、持続可能な開発目標（SDGs）の達成に貢献したい」「自社の事業所がある国を応援したい」「周年事業のひとつとして」などのご意向からご支援を決められることが多いようです。

具体的には、どんな国のどのような分野でプロジェクトができますか？
A：2018年現在、ベトナム、ミャンマー、ネパール、カメルーンなどの活動国で、教育施設建設・修繕、水衛生設備設置、女の子の自立支援といったプロジェクトに力を入れています。その他の国や分野もご支援いただくことが可能です。お気軽にご相談ください。

● このほか、「一口100万円プロジェクト」（→P5）への支援も募集しています。詳しくは同封のチラシをご覧ください。
ご意見・ご要望はお気軽に担当までお寄せください。寄付受付・企業連携担当　TEL：03-5481-7100 / Mail：hello@plan-international.jp

「世界一大きな授業2018」にご参加ください！

「世界一大きな授業」は、世界の教育の現状を世界中で同じ時期に学び、教育の大切さについて考える世界規模のイベントです。日本では2017年、506校・グループの4万3,493人が参加しました。今年は8万人参加が目標です。世界に6,100万人もいると言われる、学校に通えない子どもたちの現状を知り、日本の私たちにできることを考えてみませんか？

【キャンペーン期間】
2018年4月14日（土）～6月30日（土）
【参加方法】
共通の教材を使って45分程度の授業を実施してください
【参加対象】
小・中学校、高校、大学、企業。個人での参加も可能
【お問い合わせ・お申し込み先】
「世界一大きな授業」事務局（プラン・インターナショナル内　担当：城谷）
Mail：gce.japan.campaign@gmail.com
ウェブサイト：http://www.jnne.org/gce/

プラン支援者の会からイベント開催のお知らせ

あなたも参加しませんか？

山形・秋田プランの会

❶「第30回山形・秋田プランの会、第11回総会」
- 日時：4月15日(日) 13時～16時30分
- 会場：にかほ市 象潟公民館／にかほ市象潟町狐森31-1

❷「第31回山形・秋田プランの会」
- 日時：7月8日(日) 13時～16時30分
- 会場：秋田中央市民サービスセンター(愛称：センタース)（予定）

❶❷共通
- 内容：プラン職員の講演、チャイルドへの手紙書き、参加者同士の交流
- 参加費：500円

※❷は7月5日(木)までにお申し込みください
- 連絡先：岩谷
  Mail：tadaya-i@chive.ocn.ne.jp

プラン広島の会 f

「チャイルドへのお手紙書き会」（毎月開催）
- 日時：4月～7月の第3日曜日 14時～16時

※本年4月より、従来第3土曜日に開催していた「お手紙書き会」を、第3日曜日に変更いたします。
- 会場：広島市まちづくり市民交流プラザフリースペース(2Fまたは3F)／広島市中区袋町6-36
- 内容：チャイルドへの手紙書き
- 参加費：無料、事前申込不要
- 連絡先：小村
  Mail：naokomura@kej.biglobe.ne.jp

プラン千葉 W

「春の例会」
- 日時：4月15日(日) 13時～16時予定
- 会場：千葉市民会館 会議室
  http://www.f-cp.jp/shimin.html
- 内容：チャイルドへの手紙書き、ほか
- 参加費：プラン千葉の会員は無料、非会員はひとり500円
- 定員：先着30名
- 連絡先：前田
  Mail：e_maeda@yellow.plala.or.jp

プラン浦和の会

「国際友好フェア2018」に今年も参加します！（ブース出展）
- 日時：5月3日(木)、4日(金) 9時～16時
- 会場：市民の森・見沼グリーンセンター（JR宇都宮線 土呂駅下車徒歩10分）
- 内容:会のブースではミニこいのぼり作り、バルーンアート、水ヨーヨー釣り、サリーの着付けなどが楽しめます。そのほかにもたくさんの催し物がありますので、ぜひ遊びにいらしてください。

プラン岡山の会 W f

「第13回プラン岡山の会」
- 日時：5月27日(日) 13時～16時
- 会場：岡山県生涯学習センター
  ミーティング室5
  http://www.pal.pref.okayama.jp/
- 内容：プラン職員にベトナムでの活動についてお話しいただく予定です
- 参加費：300円(1家族)
- 連絡先：プラン岡山の会 お世話人会
  Mail：planokayama@excite.co.jp

※申し込みは不要ですが、事前にお知らせいただけると助かります。岡山駅からの送迎が必要な方はお申し出ください。

プラン群馬の会

「プラン群馬の会 例会」
- 日時：6月10日(日) 13時30分～16時
- 会場：高崎総合福祉センター
  http://takafukushi.ec-net.jp/
- 内容：JICA群馬デスク職員によるお話（詳細は未定）
- 参加費：300円
- 連絡先：星野
  Mail：kaoru_hoshino@hotmail.com

プラン博多

「プラン博多の活動紹介&『無料学習塾』運営講座」
- 日時：6月10日（日）14時30分～予定
- 会場：あすみん（予定）
- 内容：プラン博多の活動紹介とともに、東京八王子で無料学習塾「つばめ塾」を3校運営している大山氏による講座を開催します。教育格差をなくし少しでも子どもたちへの学習支援の輪を広げたいという思いから開催が決定しました。興味のある方、ぜひご参加ください。
- 参加費：無料
- 連絡先：プラン博多
  Mail：planhakata2017@gmail.com

※席数に限りがあるため事前申込をお願いします

W ウェブサイト f フェイスブック
上記アイコンのある会については、以下のプラン・インターナショナルウェブサイトから、各会のページにリンクできます
https://www.plan-international.jp/supporter/plankai/

■支援者の会に関するお問い合わせ先：
プログラム部　TEL：03-5481-6100

コミュニティ訪問のご案内 ～手紙でしか知らないチャイルドに会いに行ってみませんか？～



2016年に、インドネシアに住むチャイルドを訪問したスポンサーの鈴木美沙さん

プラン・スポンサーシップのご支援者の皆さまは、活動地域を訪問し、チャイルドや家族と対面することができます。毎年約30人のスポンサーが、交流するチャイルドに会いに行っています。スポンサーの訪問は、チャイルドにとって大きな励みとなります。またスポンサーにとっては、チャイルドと直接会って話をしたり、プランの活動を視察したり、普段の海外旅行では決してできない貴重な体験となります。実際に訪問された方々からは、「チャイルドとの絆が強まった」「プランの活動について理解が深まった」など、喜びの声が届いています。

■ コミュニティ訪問の手順

❶ 出発8週間前までに、日本のプラン・インターナショナル事務局に連絡

現地事務所に訪問受入れの可否や訪問可能日を確認いたします。

❷ 訪問準備

航空券、宿泊先、ビザの手配等、基本的な旅行の準備はご自身による手配・ご負担となります。日本の事務局も随時サポートいたします。

❸ 訪問

コミュニティ訪問には現地職員が同行し、英語でご案内します。語学が心配な方には、日本語通訳の手配も可能です（実費。場所によっては手配が難しい場合があります）。

❹ 帰国後

「コミュニティ訪問アンケート」にご協力いただきます。

「興味はあるけど、なかなか決断できない」など、迷っていらっしゃる方も、まずは事務局までご相談ください！
※コミュニティ訪問の詳細は、以下のウェブサイトをご覧ください。
https://www.plan-international.jp/supporter/visit/

【お問い合わせ先】
プログラム部：コミュニティ訪問担当
Mail：service@plan-international.jp

「夏休み読書感想文コンクール2017」表彰式報告

読書は広い世界や人々の多様性を学び、共感性を育むために最も有効な手段のひとつです。4年目となるプランの「夏休み読書感想文コンクール」では、「途上国の女の子が課題に立ち向かうチカラや女性のリーダーシップ」をテーマに4冊の課題図書を選定。25の都道府県と海外の中高生から1,099作品が届きました。審査の結果、5校が学校賞を、中学生、高校生各3人が個人賞を受賞しました。

審査員長で直木賞作家の角田光代さんからは、「受賞者のご家庭では読書を奨励されているので、自分の言葉で書かれているのが素晴らしい」とのコメントをいただきました。

表彰式後には、出版図書編集者によるトークセッションを実施。出版社での女性の働き方、課題図書に込められたメッセージ、学校における国際理解教育などについて、会場と活発なやりとりが行われました。

※入賞作品と講評、学校賞コメントは、以下のウェブサイトでご紹介しています。ぜひご覧ください。
https://www.plan-international.jp/news/event/20171121_6106



角田光代審査員長（中央）を囲んで

プランへの寄付となる取り組みのご紹介

全国のイトーヨーカドーに募金箱を設置！

株式会社イトーヨーカ堂は2016年3月より、国内のGMS（総合スーパー）として初めて、全国のイトーヨーカドーおよびザ・プライスの会計レジに募金箱を設置。年間を通じてお客様・従業員へ募金を呼びかける活動を展開しています。この募金箱は3カ月毎に、さまざまな社会的課題の解決への一助になるテーマを決めて実施されており、プラン・インターナショナルはその募金活動の寄付提供先のひとつとして選定されています。昨年も9月から3カ月間の募金活動で集められた寄付金全額で、シリア難民の子どもの教育支援プロジェクトにご支援くださいました。期間中は店内の壁にプランの大きなポスターも掲示され、多くの方にご支援をいただきました。ありがとうございました。



各店舗のレジに設置される募金箱

※「プラン・ニュース」No. 108は、7月上旬にお届け予定です

コミュニティ訪問に行ってきました!

VIETNAM
ベトナム

懐かしい家族に再会したような温かい気持ちに包まれました。

2004年から交流していたインドのチャイルドは、コミュニティでのプランの活動が完了したために、5年で交流終了。当時仕事が多忙で、コミュニティ訪問できなかったことが今も悔やまれるという牧薫さんは、「今度こそ!」との思いでベトナムの山岳地帯へ旅立ちました。



スポンサー：牧 薫さん／愛知県
チャイルド：ニュンちゃん（女の子／訪問時4歳）

長年働いてきた仕事も、年齢的なこともありペースダウンが可能に。これをきっかけに「ほかのことにも目をむけてみよう」と決断したのが、コミュニティ訪問でした。

昨年6月から交流しているニュンちゃんは、ベトナム山岳地帯に暮らす少数民族・ザオ族の女の子。訪問の2カ月前から日本の職員の方にあれこれ相談にのっていただいた結果、やはり自力で移動するのは難しいということで、現地の通訳兼ガイドさんとドライバーさんに全行程同行していただく手配をし、12月1日、日本を旅立ちました。

コミュニティ訪問当日は、まず、現地事務所の所長さんが、地域の活動内容を説明してくださいました。それからコミュニティにむかい、最初に幼稚園を訪問。そこでお友だちなどと一緒にニュンちゃんが出迎えてくれたのですが、民族衣装の首飾りが重かったのか、あるいは緊張して待っていたせいなのか、なんと私の顔を見るなり号泣！　私もショックでしたが、お姉ちゃんにうながされて私のもとに来ると、その後はどんどん打ち解けて、最後には私の膝の上から動かないほどになってくれてひと安心でした。

さて、幼稚園からニュンちゃんの家に移動すると、そこには彼女のひいおばあちゃんから4世代の家族が一緒に暮らしていました。ここからは、お母さんと近所の女性たちが作ってくれたごちそうを囲んで、賑やかなランチタイムの始まりです。まだ4歳なのに、ザオ族の刺繍を器用にやって見せてくれるニュンちゃん、その刺繍のやり方を私にも教えてくれるひいおばあちゃん、私の手をさっと握って話しかけてくれるおばあちゃんなど、とにかく皆さん優しくて、とっても素敵な笑顔！　私も持参した日本の風景のカレンダーを見せながら、日本のことを説明したりしたのですが、何だか懐かしい家族にやっと会えたような、温かい気持ちに包まれました。

今回の旅では、ガイドさんがほかの少数民族のコミュニティにも連れて行ってくれて、プランの活動地域とそれ以外の地域では、衛生状態がまったく違うということも実感しました。今後、プランの活動がどんどん拡大してくれることを願ってやみません。でも一方で、どの少数民族の人たちも、経済的には貧しくても皆さん本当に人懐っこくて幸せそうで……開発がすすんでも、人は変わらないでほしいと思いました。コミュニティ訪問は、「本当にほんとうに行ってよかった！」のひと言です。数年後、必ずまた訪問したいと思っています。

旅のスケジュール

2017年	12月1日（金）	中部国際空港（午前発）～ハノイ（午後着）
	12月2日（土）	ハノイ市内観光～寝台列車でラオカイへ
	12月3日（日）	ラオカイ着（早朝）～シンホー（車で約5時間）
	12月4日（月）	コミュニティ訪問
	12月5日（火）～ 12月10日（日）	サパ、ルンカウニン、ハロン湾の 1泊2日クルーズなど
	12月11日（月）	ハノイ（深夜発）～中部国際空港（早朝着）

● コミュニティ訪問は、
出発日の 8 週間前までにお申し込みください。
手続き方法などの詳細は、ウェブサイトをご覧ください
→ https://www.plan-international.jp/supporter/visit/



幼稚園で「一番かわいい!」と思ったニュンちゃん。右上は賢そうなお姉ちゃんと、こちらもかわいい妹さん



ニュンちゃんが通う幼稚園で

PLAN NEWS
2018 SPRING NO.107

公益財団法人プラン・インターナショナル・ジャパン
〒154-8545 東京都世田谷区三軒茶屋 2-11-22 サンタワーズセンタービル 10F
TEL：03-5481-6100　FAX：03-5481-6200
www.plan-international.jp

表紙写真：ネパールの女の子